

農業をすることは誰もが楽しい

農業と福祉の連携は今

就農者が減少する中、障害を持っていても農業の担い手として活躍するケースが増えています。
ここでは、そんな事例を紹介します。



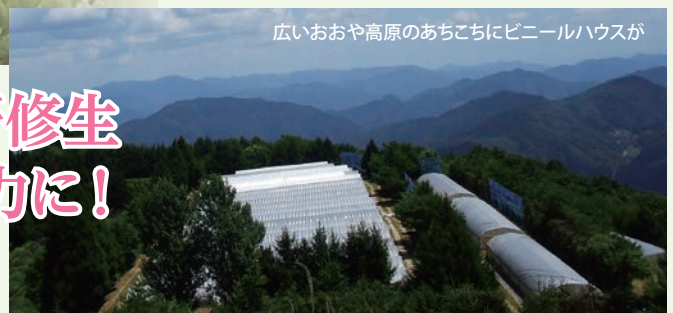
養父市 施設外
支援
(※1)

アグリハイランド金谷

代表取締役

金谷 智之さん

養父市おおや高原に合計33棟のビニールハウス(2.3ha)で葉物野菜やミニトマトを有機栽培。冬は積雪のため4月～12月の期間だけ出荷。朝来市にもビニールハウス3棟(通年出荷)。従業員7名。



広いおおや高原のあちこちにビニールハウスが

社会福祉施設の作業所から研修生 こつこつと真面目な作業で戦力に！

養父市のおおや高原で有機野菜を作る「アグリハイランド金谷」では、知的障害のある2人が研究生として週2回、農作業に従事しています。

1994年同じ大屋町にある「社会福祉法人 さつき福祉会」に、職業訓練の場所を提供したのが、きっかけ。車いすの重度の障害者など多くの障害者が利用した後、1999年には比較的農作業ができる4～5人に「さつき福祉会」の職員1人が同行して、有償として援農を始めました。

2004年に援農に来ている人の中から農作業に向いている2人をスカウトし、「施設外支援での現場実習を開始しました」と、代表の金谷智之さん。



作業の単純化で、仕事が効率化 目標を明確にして達成感を得る

金谷さんは実習生2人が仕事を覚えやすいように、工程ごとに細かく分けて作業を単純化し、役割を明確にするように工夫しました。「例えばミニトマトの誘引をひもで結ぶ方法から、洗濯ばさみのようなピンチョで挟む方法に変更するなどした結果、仕事が効率化しました」。

現在実習生2人は、野菜の収穫や収穫後の片づけ、肥料まき、ビニールハウスの片づけなどを担当。「コツコツと真面目に仕事に取り組んでくれる」と、金谷さんはその仕事ぶりを高く評価します。

長く仕事を続けてもらうためには、「目標を明確化し、達成感を持てるようにすることが大切です。同時に実習生と健常者を区別せず、同じように接するようにして、アグリハイランド金谷の一員として、やりがいを感じられるように工夫しています」と話します。17年間も働いている実習生は「ここで一番のベテランです。農作業は楽しい」と胸を張ります。

(※1) 施設外支援：施設利用者が企業内などで行われる企業実習など事業所以外で行う作業

淡路市 雇用

北坂養鶏場

代表

北坂 勝さん

淡路市内の鶏舎で国産鶏にこだわり約15万羽を飼育、生活協同組合おおさかパルコープを中心に鶏卵販売。プリンの製造販売も。淡路市育波に直売所、淡路島内に6か所の鶏卵の自動販売機を設置。従業員47人。



選卵場

発達障害者の適正に合う仕事を 周囲の理解で職場の空気が変わった

「北坂養鶏場」では、従業員47人のうち3人に軽度の発達障害があります。「2人は普通の求人活動で雇用。しばらくしたら、仕事が見えづらいなど、軽度の発達障害があることが分かりました。もう一人は知人に頼まれて働いてもらっています」と代表の北坂勝さん。

仕事場は養鶏を行う鶏舎、卵の洗浄・選別・梱包などを行う選卵所、卵などを売る直売所などがあり、それぞれに業務が異なります。発達障害のある人には、一人一人に合う仕事を北坂さんが考え、担当してもらっています。

2014年に最初に軽度の発達障害がある人が入社した際には、「何回も同じことを言っても覚えられない」と、周囲の人にとってストレスになったこともありました。「最初にラインで流れ作業をする選卵場の仕事を担当してもらいました。その後だんだんと覚えられる作業が増え、さらに彼の下に新入社員が入ってきたら、しっかりしてきました」と北坂さん。シフトの工夫や、周囲の理解が大きかったと言います。

2019年4月に採用した中の1人は、「ペースが他の人たちとは違う」と感じ、自分のペースでやれるひよこを育てる仕事の担当に。また、「以前は接客の仕事をしていたが、最近は家に引きこもりがち」と知人に頼まれて受け入れた人は、経験を生かして直売所の担当として働いてもらっています。

誰もが働きやすい職場環境に 仕事をマニュアル化し分かりやすく

障害のある人が仕事をするときには、健常者が一緒にシフトに入るなどの配慮も。「しんどそうなときは働く時間を減らします。心と体のバランスに合わせて、仕事をしてもらっています」と、目配り、気配りも忘れません。

「北坂養鶏場」では、誰もが働きやすい職場づくりをしようと、仕事のマニュアル化や分かりやすい表示・デザインを増やしました。2019年には5S活動として職場環境の改善に取り組んだ結果、従業員全員が意識して職場をよくしていこうという雰囲気に変わりました。「(発達障害の人への)声のかけ方など職場の空気が変わりました。本当に良くなった」と北坂さん。

「我々一次産業は求人難、来てくれる人はありがたいし、長く働いてもらえるように大切にしたいと思っています」。



純国産鶏「さくら」の卵を使用した
「たまごまるごとプリン」

三木市

施設外
就労
(※1)

花卉園芸 長谷川 長谷川 いづみさん

施設園芸は花壇苗を中心に周年栽培。

野菜苗は実生、接ぎ木、プラグと幅広

く栽培。水稻は山田錦を主に栽培。

3,000㎡(花壇苗、野菜苗)、水稻4ha。

従業員3名



園芸療法を学び 農を通して植物と人が成長できる場に

三木市の「花卉園芸 長谷川」には、週3回神戸市北区の「特定非営利活動法人ひやしんす」(※2) から利用者3～4人がスタッフと共に来て、ポットに土を入れたり、苗を定植するなどの作業を行っています。作業を見守る長谷川いづみさんは、2012年から2年間、兵庫県立淡路景観園芸学校園芸療法課程で学び、兵庫県知事認定園芸療法士の資格を取得。兵庫県園芸療法定着促進助成事業の一環として、2017年に「ひやしんす」で園芸療法を行いました。「植物との関りを通して、利用者の皆さんの前向きな発言や姿勢が見られました」と、ひやしんす施設長も長谷川さんも共に園芸療法の可能性を実感。同法人の施設外就労の場として、同年10月から作業委託しています。



灌水やポットに苗を植える作業で、

「土を触り、太陽にあたることで元気になった」との声が聞かれます

年間を通して一定量の作業を提供 働きやすい環境を用意

「週に数回通ってくる彼らの暮らしのリズムを作るため、農繁期や農閑期・天候に左右されず、年間を通して一定量の作業の提供が必要です。また、農作業とのマッチングも大切」と、委託を継続させるための工夫を。ハウス内での作業がしやすいようにと、立ったまま、あるいは座って作業できるように、腰の高さの作業棚を作りました。毎回の作業では、農具などをきちんと管理し、けがをしないように注意。見守り、声かけを心掛け、何よりも「意欲を持ってもらうこと、が重要だ」と言います。

「わかりやすい作業は徐々に任せられるようになった」と、作業に当たる彼らの成長を感じる長谷川さん。「人手不足を補うことだけが目標ではなく、農業を通じて成長し、彼らが次に進むステップの場所になってほしい」と、温かく見守ります。

(※1)施設外就労:企業などの業務の一部を事業所が請け負い、事業所職員の支援のもと施設利用者が企業内で行う作業

(※2)特定非営利活動法人ひやしんす:身体・精神・知的障害者、高齢者が社会での役割を創出する活動を行い、就労継続支援B型事業所などを運営



障害者の就労支援を行う企業に対して助成する
設備等整備補助金を利用して作った作業棚
作業は見える化・単純化して長谷川さん(左)が指導

神戸市
北区

加工
委託

すまいるふぁーむ藤本

代表

藤本 耕司 さん

神戸市北区大沢町で、いちご、ぶどう、いちじく、
スイートコーンを主に生産・販売。ハウス栽培は、
いちご4,000㎡、ぶどう1,000㎡、いちじく700㎡。
露地栽培はスイートコーン3,000㎡など。直売所
を運営。従業員6人。



神戸フルーツフィナンシェで事業所と縁が GW明けにはジャムの生産を委託

神戸市の北区大沢町でいちごなどの生産・販売を行う「すまいるふぁーむ藤本」は、乾燥加工した神戸産果実・野菜を使ったスイーツ開発企画事業に参加。開発されたスイーツは2019年4月から「神戸フルーツフィナンシェ」として発売されています。「すまいるふぁーむ藤本」は当初、いちごやいちじく、ブルーベリーを提供。事業代表者「株式会社CUADRO」は福祉との連携も考え、果実などの加工を就労継続支援B型事業所「くすのき」(伊丹市)に委託しました。

現在、「すまいるふぁーむ藤本」ではいちごを提供。「くすのき」にはパッケージの作成だけ依頼しています。「果物・野菜の加工をしてもらっているときは、障害のある人も『くすのき』のスタッフと一緒によくうちに来ていました」と、代表の藤本耕司さん。



神戸フルーツフィナンシェ



1カ月で障害者の雇用を断念した経験も 何ができるのか見極めることが大切

「身近に障害者がいることもあり、障害者が働く場の提供を考えたことがありました」と藤本さん。2013年いちごを高設栽培に変え規模を拡大したとき、人手が必要となったため、障害者の雇用を試みました。「障害がある人はできることが一人一人違います。いちご栽培は収穫の力加減など作業が繊細なので、不向きでした」と、約1カ月で雇用を諦めることになりました。

ゴールデンウィーク明けには、多量にB級品が出るため、これを使っての、オリジナルいちごジャム作りを計画。障害者の就労に関心があった藤本さんは、「神戸フルーツフィナンシェ」でできた「くすのき」との縁を大切に、「その作業をくすのきに委託しようと思っています」。障害者ができることを見極めて、事業パートナーとして障害者との関係を築いていきます。

令和2年3月
発行

「農」イノベーションひょうご推進協議会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 兵庫県庁1号館6階 総合農政課内
TEL.078-362-9216 FAX.078-362-4458
<http://nou-inno-hyogo.jp>

